

日本における韓国教会の成長要因に関する研究

—Y教会分析—

鄭根河*

(e-mail : Wrg3141@naver.com)

目次

1. はじめに
 2. 専攻研究
 3. 研究対象と方法について
 4. Y教会の分析
 5. 結び
-
-

1. はじめに

韓国キリスト教会の中では、新しい小グループ活動が注目を浴びている。新しい小グループ活動とは、年齢、専門分野、社会的な立場など、似通った社会層の人たちが組を組んで、活動をする小グループである。この小グループ活動は1980年代に韓国の大学の宣教団体が中心になって新しい組織を造り、活動し始めた。2000年1月には、4000以上の教会が新しい小グループ組織を導入し活動していると報告されている。

Y教会を分析すると、戦後日本の新宗教の成長の過程と、さまざまな共通点が見出される。すなわち、Y教会で採用している小グループの「筭」は、高木宏夫と井門富二夫らが、新宗教組織の原型としてあげている「講」、創価学会の「座談会」ととても似ている。また、森岡清美が、『宗教運動の展開過程』で述べている、布教した者と布教された者（ないし師僧と弟子）とが個人的情愛的に結びつく「親子関係」に結ばれているという点は、Y教会の「筭」の中の「筭長」と「筭員」との関係がまさにそれにあてはまるものである。

日本の新宗教の特徴の一つである布教方法とも共通点が見出される。新宗教の多く

* 首都大学東京人文科学研究科社会学専攻。

は、信者を1人でも増やそうとさまざまな試みをしており、拡大再生産型の布教活動をしている。こうした活動を有効に推し進めるためには、特定の人が布教を行うのではなく、信者全体が布教を試みる態度のほうがよい。その教団のすべての信者が布教者たることを求められるような態勢を「万人布教者主義」と呼ぶ。万人布教者主義をとると、短期間に信者が急速に増えるという現象が起こりうると井上順考は『現代日本宗教社会学』で述べている。

Y教会も、一人一人が「万人布教者」であり、誰でも小グループのリーダーになれる平等な機会が与えられている。それは、実力によってリーダーになれるシステムと言ってよい。

日本における韓国系キリスト教会の研究は乏しく、都市社会学では韓国人留学生たちが定期的に教会へ行くという実態は報告されているものの、どのような活動をしているのかは明らかにされていない。また、林永彦氏の『韓国企業家』では韓国のニューカマー企業家たちが韓国系キリスト教会に行く理由について分析しているものの、教会の組織や活動の内容、教会の成長に関する研究はなされていない。本稿はこうした研究の空白を埋めるという点に意義がある。

2. 先行研究

2.1 日本の新宗教に関する先行研究

日本の新宗教に関する先行研究を整理すると、4つの特徴にまとめることができる。

第一に、日本の新宗教は「親子関係」といった上下関係の組織である。

第二に、日本の新宗教の組織は少人数の小グループである。

第三に、日本の新宗教は実力主義である。

第四に、日本の新宗教は万人布教者主義である。

まず、「親子関係」に関する研究として高木宏夫と井門富二夫らの研究があげられる。高木は、「宗教的講の機能」[1956]において、「日本農村の各地にあって殆んど普遍的な集団である」(p.221)「講」の一般的組織形態を、江戸時代の旧村あるいは自然村の範囲内に「家」を単位として形成されるものととらえている。井門は、「産業化社会における教団組織論」[1972]のなかで、やはり、天理教、金光教等の新宗教組織の原型を「部落あるいはそれに類する地域的組織」(p.187)のなかに布教者を中心として形成される「講」に求め、これが「縦の布教」によって地域社会を超えた「親子関係を持つ講」(同上)に発展し、やがて「大教会—分教会—講」(p.188)という親子の縁によるヒエラルキー組織を形作るようになる、としている。高木と井門はここで「講」とともに「親子の理」「親子関係」を重視しているが、森岡清美は、[1980]で、このう

ちむしろ「親子関係」の方を強調し、新宗教組織は「教祖あるいは教祖の地位を継承する者を核として、導きのおやこ関係の連鎖によって構成されている。これが日本における宗教運動体のいわば組織原型である」(p.5)と述べている。菱山謙二は、「天理教教団組織の研究」(1976,1977)のなかで、天理教の組織構成が伝統的原理としての「親子の関係」と「講・組集団」によってなされているとしている。

第二の日本の新宗教の組織は少人数の小グループであるという点は、具体例として、創価学会の「座談会」、霊友会の「法座」、真如苑の「経(すじ)」などをあげることができる。こうした小グループ組織に参加することによって、信者たちの人格が確立されることをはじめ、人間的な目覚めを体験したり、連帯性、同志意識が芽生えたり、教化されつつ教化する者となるのである。たとえば、高木宏夫は「大衆組織としてみた新宗教—大衆組織における生活規律の問題—」[1959a]の中で「新宗教の教団組織は、通常末端に『法座』のようなサークルを置いて、その統合体として支部、さらに支部を統合する本部があるというように、三段階をとって」おり、そのうちサークルは、「人間形成をする場として最も重要」であり、人数的には20人が限界とされ、これ以上増えれば直ちに細胞分裂をさせて2つに分けられる(P.214)と詳しく指摘している。小グループに注目した研究としてその他、三浦つとむの『大衆組織の理論』[1959]、清水雄人「新宗教団体における教学と教化のあり方について」[1969]、井門富二夫「産業社会における教団組織論」[1972]、森岡清美の「法座と真宗のオザ」[1976b]などの研究がある。

第三の日本の新宗教は実力主義であるという点に関して、西山茂は「新宗教の発展を可能にした社会的文脈が存在しても、それに適合な主体の側の要因がなければ新宗教は発展しない」[1980a,p.265]といい、新宗教運動は、人々を惹きつけ、運動に参加するように動機づけなければならないと示唆している。それでは人々を惹きつけるものというのは何だろう。それについて、村上重良は[1967a]、i 現世利益の約束、ii 人生問題の解決、iii 使命感の付与の3つを挙げており、高木宏夫は[1959d]で、i 現世利益の提供、ii 孤独感を解消する共同体、iii 実力本位の組織、iv 生活規律など挙げている。また、三浦つとむの『大衆組織の理論』[1959]では、i 学閥や肩書の物を言わない質力主義、ii 男女平等、iii 実践による思想の正しさの確信、iv 他人の悩みに対する見せかけでない真の共感と同情などを挙げている。

新宗教の世界では、自分より上にいると思っている人をも布教によって説きふせ、指導することになる。いまだかつて経験したことのない、人の上にならなくて指導するという新しい毎日の生活が、現実にこの世で展開することになる。入信によって、いままでとはちがった新しい社会秩序が生まれ、しかもこの世界では、自分の力＝布教力がそのまま実力として通用するのである。現実の生活に絶望して、新しい世界観・人生観を宗教に求めて、あらたに現実を見直してゆくということは、なにも新宗教だけに特有のものではなくて、ひろく宗教一般に通じる問題である。ところが、現世利益を求める大衆にとって、人生の門出や出直しの機

会を与えうるのは新宗教だけである。それはだれもが簡単に布教師となって、自分の考えを人々にうたえ、布教の力によって自分が指導者になれるからである。

第四の日本の新宗教は万人布教者主義であるという特徴は、実力主義という特徴と重なるものである。ただ、日本の新宗教の独特のものとして布教方法がある。新宗教の多くは、信者を1人でも増やそうとさまざまな試みをする。これを「拡大再生産型」の布教と呼ぶことができる。他方、既成宗教のほうは通常、「単純再生産型」と呼ぶことができるであろう。つまり、すでに氏子や檀家である人たちが、地縁血縁原理によってその関係を維持してくれることに、主たる関心を寄せる。拡大再生産型は布教に当たって、地縁血縁だけに依存しない。同じ会社に勤めている社縁も使う。同級生であったとか、同じサークルであったとかいった関係も利用する。さらに、何の関係もない人に街頭で声をかけたり、戸別訪問によって布教を試みたりすることもある。しかしながら、見知らぬ人に対するいわば「無差別布教」を試みる集団はそう多くはない。拡大再生産型の布教を有効に推し進めるためには、特定の人が布教を行うだけではなく、信者全体が布教を試みる態度のほうがよい。その教団のすべての信者が布教者たることを求められるような態勢を「万人布教者主義」と呼ぶ。万人布教者主義をとると、短期間に信者が急速に増えるという現象が起こりうる。新宗教の万人布教者主義に関しては『新宗教辞典本文編』をはじめ『現代日本の宗教社会学』、『新宗教研究調査ハンドブック』などで言及されている。

2.2 韓国系キリスト教に関する先行研究

海外の韓国系キリスト教に関する研究はアメリカの研究がある。まず、コン (Kwon, 1997) のヒューストンにおける研究と、ユン (Yoon, 1998) のアトランタにおける研究がある。この研究では、キリスト教会が韓国人コミュニティにおいて重要な役割を果たしていることが明らかにされた。これらの研究はキリスト教会が韓国人企業家の経済活動に必要な資源を確保する場を提供することであると報告されている。また、コンは、エスニック教会研究において、「韓国人エスニック教会は、移民者たちが定着において必要な実際のインフォーマル・サービスを提供するインフラを構築している」と報告した (Kwon, 1997: 114-116)。さらに、移民者たちはエスニック教会に行くことによって、情緒的サポートが得られたと報告している。移民者たちはホスト社会の苦しい生活のストレスや、移民定着におけるショックを教会に参加することによって緩衝させた。また、教会は移民者たちが集まる場所であり、韓国の移民企業家にとって顧客の潜在的なマーケットとなったと報告されている。

また、田嶋の研究は、新宿大久保地区の韓国系ニューカマー企業家を対象にして、エスニック企業と企業の繁盛は、宗教施設を中心としたエスニック・ネットワークにあることを明らかにした。エスニック企業家層の形成は宗教施設の増加とともに、ニューカマーの接点を多様なものとし、さらに留学生の駐在員への移行、日本・外資系企業への就職を介して量的にも厚みを増していく状況が示されている。つまり、韓国系キリスト教会のネットワークを基盤

とした韓国人企業家の企業形成などが分析された（田嶋、1998：212-220）。

イム（林、2004）は、東京新宿の職安通りで活躍している韓国人企業家の実態を徹底的に調査した。彼は、韓国系エスニックキリスト教会に関するアメリカ研究や日本の研究（コン・ユン・田嶋の研究）を踏まえ、1980年代以後、自発的な意思によって来日している韓国人ニューカマー企業家たちとキリスト教会との関係を明らかにした。

2.3 小グループに関する研究

韓国のキリスト教会に小グループ活動が登場した要因は、まず、教会が社会統合的機能を果たさなかった上に、さらに教会が分裂、反目する現状に対する世間の批判からだった。つまり、韓国社会の近代化と共に、大きく成長した韓国キリスト教会は、量的成長だけを強調して、教会構成員の質の成熟は度外視したのである。それによって信者たちの質は低下したが、教会は、ますます大きくなった。そして、信者たちの間では人格的な交際がし難くなり、それゆえ、教会の本質的要素の一つとも言われる、信仰の共同体性に対する意識はだんだん薄くなり始めた。こうした韓国社会の合理化に伴う価値観の変化、産業化及び都市化による個人主義的な生活への変化、物量主義価値観、成功主義などの世俗的な価値観が教会の中でも蔓延し、教役者たちも繁栄の神学を中心にして、成長第一主義の強調、自教会中心主義などを強調して来た。信者たちの増加と質の低化は教会での信者たちの役割や位置を顧みる機会を与えてくれた。韓国キリスト教会は1980年代から、信者に対する教育に興味を示し始めたのである。つまり、今までは信者たちの全人教育があまりにも欠けていたことに気付いたのであり、こうした教育を小グループを通してやり始めたのである。

小グループを通じた信仰共同体を中心とした教育は、従来の詰め込み式知識伝達体系を克服するための対策として登場したものであった。1970年代の韓国教会のリバイバルの時期を経て、1980年代の韓国教会は、弟子訓練小グループ活動の時期を迎えたのである。

韓国のキリスト教会のどれくらいの教会が小グループ活動をしているのか。残念ながら、これについての正確な資料はない。ただし、弟子訓練を実施している教会を通して間接的に推算して見ることはできる。韓国国際弟子訓練院の弟子訓練指導者ゼミを通して、2001年1月現在、5375人が輩出された。それを根拠として推測すれば、4千くらいの教会が弟子訓練を実施していると判断される。ちなみに、韓国のキリスト教会は約4万5千から5万くらいの教会があると報告されている¹⁾。

韓国内の小グループ活動に関する研究は、ロバトヘステネスの『小グループのための聖書研究指針書』（1990年）をはじめ、ギルバトマレイ『監理教会属会』（1991年）、

1) <http://www1.worldlink.co.kr/bluebod/buboard.cgi?db=fycsg&page=1&act=pread&num=56>

チョンドウグン『牧会と神学』“今日の区域制度、なぜ問題なのか”7巻5号（1996年5月）、ファンソンチョル『牧会と神学』“伝統的区域制度の寄与と限界”7巻5号（1996年5月）、ムンソクホ『21C韓国教会と共同体運動』（1998）、オクハンウム『平信徒を起こせ』（1998）、チェイソク/リサンファ『元気な小グループ活動どうやるか』（2000）、オクハンウム『書き直した平信徒を起こせ』（2005）などがある。

2.4 その他の韓国人留学生に関する研究

その他に、外国人研究では韓国人ニューカマーたちの実態調査もなされているが、たとえば奥田道大らの（1991、1993）の研究をはじめ、栖原暁（1996）の研究がある。この調査により外国人留学生たちの生活パターンが明らかになった。しかし、両研究では韓国人留学生たちの生活パターンの中、日曜日は教会に行くことまでは把握できているが、どういう活動をしているのかは明らかになっていない。

3. 研究対象と方法について

3.1 研究対象

Y教会は、東京の新宿に所在している韓国系キリスト教教会である。この教会は1988年、16人の韓国人留学生や社会人で発足し、2006年現在は、3554名の信者たちが集まっている。Y教会は今、日本で一番大きい教会とも言われるほどの教会として成長している。

3.2 研究方法

筆者はY教会の礼拝をはじめ、筭の集まり、聖書勉強会、早天祈り会、各種の行事、サランバンなどに直接参与観察し、また、この教会から刊行される文献の調査も行った。さらに、インタビュー調査による事例調査を採用した。

また、Y教会に通っている信者たちを研究対象にして、この論文の目的を説明し、一人一人に録音するなどの了解を得て、インタビュー調査を行った。インタビュー調査は、日曜礼拝の後とか、教会の行事の後で行った場合が多かった。その他は、直接連絡を取って、信者の都合に合わせて、会う場所を決めてデータを取った。

インタビュー調査を行った時期は、2006年5月から9月まで約4ヶ月にかけて行った。研究対象は東京にあるY教会の信者たちであり、インタビュー調査に応じてくれた信者たちは、全員韓国人で、留学生（大学生や専門学校、日本語学校に通っている10人）や社会人（7人）を合わせ、17人であった。17人の信者たちの信仰暦は1年未満の方から10年

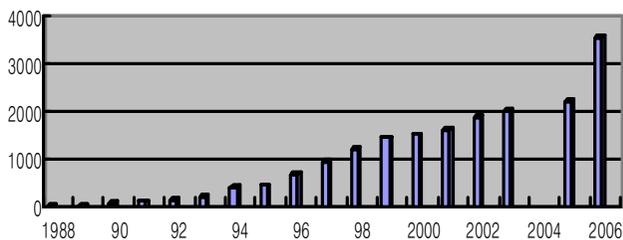
以上、信仰生活を続けている方まで幅広く分布されていた。また、10年未満の人が多かったため、来日10年未満の方だけを対象にしてインタビューを行い、データを取った。ちなみに、インタビュー調査に応じてくれた信者たち全員は、東京都内に住んでおり、容易く会うことができた。

4. Y教会の分析

4.1 Y教会の推移²⁾

Y教会は1988年10月2日、16人の留学生や社会人が集って始めた韓国系キリスト教会なのである。この教会は、活発に伝道活動をしており、毎年ねずみ算式に信徒が増え、2005年の日曜礼拝の平均出席者は韓国人だけでなんと2100人を越えており、2006年現在は、日本人や中国人まで合わせると3500人を越えようとしている³⁾。

| | | | | | | | | | |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 年 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 |
| 人数 | 16 | 46 | 87 | 136 | 190 | 242 | 428 | 474 | 731 |
| 年 | 99 | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 미정 |
| 人数 | 1464 | 1540 | 1636 | 1881 | 2035 | 미정 | 2214 | 3554 | 미정 |



4.2 キーワード説明とY教会の組織

Y教会を分析する前にキーワードである「筈、筈長、筈の集まり、サランバン(사랑방)、弟子訓練」という言葉の意味を知る必要がある。

この教会で一番小さいグループが筈である。筈は筈長がいて始めて筈と呼ばれるようになる。筈は筈長自身が伝道活動を通して伝導した人たちを自身の筈員として編入させて築き

2) 資料：『ミリアル』vol. 29, 2003年春号と2006年までの週報参考

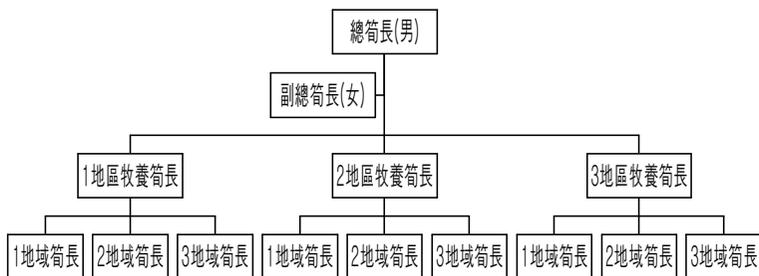
3) 2006年の調査によるものである。

上げる組織であって、筈長自身の努力次第で筈員の数は変わる。つまり、筈に筈員が少ない場合、筈長と筈員2人で構成される場合もあれば、多い場合は20人で構成される場合もある。最悪の場合、筈長だけいる場合もある。この教会の筈は、普通4～6人で構成されている。

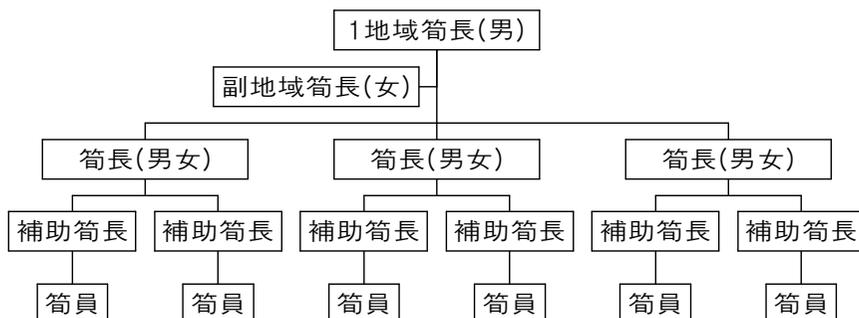
そして、筈長であるが—筈長システムは教会ごとに定義が異なる場合がある—Y教会では一定の定められた期間の教育と訓練を受けた信者たちを対象に、宣教師や伝道師たちが筈長として相応しいと思われる人を改めて訓練させている。訓練課程を通して、伝道師や副牧師（宣教師）たちは信者たちの人間性、社会性、人間関係を総合的に評価する。また、それに引けを取らないくらい重要視される筈長の資質として挙げられるのが伝道に対する積極性であるという。

こうして筈長の資質を満たした信者たちを宣教師や伝道師たちは担任牧師に報告し、担任牧師は推薦された平信徒を筈員をケアする筈長と任命する。こうして任命された平信徒指導者をY教会では筈長と呼んでいる。2003年現在、Y教会には500人くらいの筈長がいる。

Y教会の青年部の組織図（1地区～7地区まである）



※ 地区の中の地域の組織図 ※



また、筈の集まりとは、日曜日の礼拝後、筈長自身が伝道した補助筈長や筈員たちを対

象に聖書勉強を行う時間である。この時間は筭員と筭長が公式的に会う1週間で一回しかない貴重な時間なのである。この場を通して筭長は聖書勉強をはじめ、伝道活動、筭員へのケアなどの実践を行う。こうした信仰実践を通して、新しい筭長を生み出すのがこの組織の目的である。

普通、誘われて来た新しい信者が、自ら信仰告白をするまでの道のりはずいぶん長く、信仰告白に至るまで、筭の集まりの機能が存分に活かされるのである。筭の集まりという小グループの人たちは、1人の新しい信者が信仰告白ができるまで、さまざまな社会的、個人的なサポートを提供する共同体なのである。

サランバン(사랑방)は韓国の教会でよく用いられているシステムである。韓国の教会などで使われているサランバンは、普通、信者たちが集まって聖書勉強をしたり、会議などを行う教会の中のある部屋を指す時とかまた、教会の近くに住んでいる結婚していない一人暮らしの青年の家を〇〇サランバンという風に呼んでいる。

一般の留学生にとって部屋探しはなかなか難しい仕事である。一般の留学生たちは、学校の近くに住もうと思って、部屋を探して見るが、部屋がなかったり、大家さんたちが外国人はダメだと、きっぱり断れてしまったりする。ようやく部屋を借りたが、大家さんとの、文化的な違い、習慣の違い、言葉が通じないことなど、思いにも寄らなかったことが起きたりする。それで、留学生たちは学校の友達やインターネットなど、ありとあらゆる手段を用いて、部屋の情報、ルームメイトの情報を集める。そうした努力によって、ようやく部屋や、ルームメイトが見つかるが、順調な生活ができるかどうかはまだ分からない。ようやく出会ったルームメイトと一緒に住んで見ると、お互いの経験や、成長の背景、考え方が違うため、トラブルが起きてしまったりする。そういうことはよくあることで、そうした状況をうまく乗り越えれば、仲良く生活できるが、うまく行かない場合が多い。

サランバンのメンバーはだいたい、4~5人くらいで、ちょっと多いと言える。しかし、その分、家賃も安くなるので、サランバンのメンバーで金銭的に追い込まれる人はいないらしい(家賃は一人当たり、2万円くらいで済むらしい)。部屋は2LDKの物件が圧倒的に多いが、住んでいる人たちに、狭いかと聞くと、それほどでもないという答えが返ってくる。サランバンのメンバーは全員、クリスチャンなので、外の留学生たちのルームメイトとはまったく違う絆で結ばれるのである。

弟子訓練とは、弟子の再生産システムでもある。グループのリーダーが人を伝道し、伝道された人を一定の期間まで徹底的に教育し成長させる。そして、新しい人が、また伝道して新しいグループを再生産するシステムである。この小グループのメンバーのほとんどは訓練されており、献身しようとして心にかけているので普通の人が容易く参加することは難しいという短所がある。しかし、それは強い平信徒指導者を生み出す長所でもある。

4.3 Y教会が成長の要因分析

Y教会が目指している教会の牧会方針は、日本の大学生たち（韓国からの留学生も含まれている）をクリスチャン化すること、すなわち、日本の大学生宣教なのである。そのため、この教会の人たちは学生たちの伝道に全力を尽くしている。そして、日本の大学生を伝道するために、この教会では大学進学を目指している日本語学校の韓国人留学生や、韓国語が通じる中国の朝鮮族学生たちまで伝道対象を広げている⁴⁾。こうした努力の結果が実を結び、今のY教会になったのである。こうして伝道された学生たちを教会で訓練させ、大学に送り、布教することがこの教会の最終的な目標である。

4.4 Y教会が成長した諸要因分析

①Y教会の信者たちはみんな布教者である。

新宗教の教役者（布教者）は神様からの“呼び”や何だかの兆しがあってから献身するようになるが、Y教会では一般の信者や非信者だった人が急に教役者（布教者）になろうと思ったり、また教役者のように生活している。それはとても珍しいことであるし、なぜそういう風になるのか調べる必要がある。

Y教会で一般の信者たちの生活を観察して見ると、いわゆる、平信徒指導者、「筭長」、「補助筭長」、「熱心な筭員」と呼ばれている人たちの生活は、まさに布教者そのものなのである。ではなぜ、今まで普通に信仰生活を営んで来た一般の信者や非信者たちが嫌な顔もしないで布教者のような生活をしているのか。その理由は、この教会でやっているすべてのプログラムが留学生たちの必要に十分に応じられているからである。

まず、来日した留学生は成田空港に到着するやいなや、言葉の壁にぶつかって戸惑いがはじまる。その時、親切な韓国の先輩が現れ、助けの手になってくれる。顔も名前も分からない人が、同じ民族であるだけの理由で、これから生活する寮まで一番安く、早く着く方法を説明してくれるだけでなく、荷物まで分けて寮まで一緒に同行してくれる。また、国で心配している親を安心させるために、到着報告の国際電話までかけてくれる。電話を受けた親は先輩に感謝の意を伝え、これからの子供のことを頼んだり、先輩の名前や田舎の実家の電話番号を聞き、先輩の親に感謝の意を伝えたりして、お互いの信頼感を確かめる。新しい留学生はすっかり先輩に惹かれて、留学生活全般にかけて影響を及ぼし、また頼る存在となる。

知らない人に助けられた留学生の中には、彼が帰ると、顔も知らない人なのになぜ、私に親切だろうと疑う人もいるが、戸惑っていた時の彼の行動は嬉しい限りであるので、余計なことは考えなくて、彼の親切な行動に感謝し、彼と約束した日曜日にY教会に出席することになる。このようにして、歳月がすぎ、留学生はやがて筭長になり、また時には宣教師に

4) Y教会の牧師は説教や自分が聞いた本でこうした発言をしている。

なっていくのである。

Y教会から、成田空港まで電車で行くと、往復で約4時間、金銭的にも往復で3千円くらいかかる。決して近い距離でもないし、安い運賃でもない。ではなぜ、Y教会の人たちは教役者（布教者）でもないのにこうした伝道活動をするのか。

それはY教会の基本組織、「筭」の構成過程を分析すれば分かる。「筭」は信者自身が築き上げる組織であり、信者自身自らが伝道活動を通して人を集めなければ「筭」は作られない。それゆえ、この教会では伝道をしなない人などは絶対リーダーには立たせないし、信仰の弱い人と見なされる。つまり、伝道しなければ教会が成り立たないシステムになっているのである。Y教会は信者たち全員を「万人布教者」とし、日本宣教に参加させる、いや、自ら参加する人材を養成しているのである。

—2地区の安さん（22歳、女、社会人）：私は今、筭員です。私は小さい時からこの教会に出席していましたが、なかなか信仰が成長せず今に至ったのです。しかし、筭長のしつこさに負けて、今は頑張ろうとしていますし、私にしつこくしてくれた筭長に、感謝しています。私はお父さんの仕事で5歳のとき日本に来ました。大学は韓国の大学で2年間生活しました。その時、韓国の一般教会に通っていましたが、Y教会みたいな親密感はどこにもありませんでした。とても緩い人間関係で、こっちから話しを掛けないと、いつまでも関係の進展は期待できなかったのです。日本に戻り、Y教会で筭長と会って、筭の集まりに参加するようになりました。私は、筭の集まりに参加することによって、今まで味わったことのない親密感を感じながら、他の筭員のために祈ったり、訪問して一緒にご飯を食べたり、伝道活動に参加して見知らぬ人に声をかけ、教会に誘ったりして、なぜ教会に行かなければならないのかという疑問と神様の愛が分かるようになりました。私も筭長になりたいです。

②筭長は実力である。

布教者のように働かせるために、Y教会ではリーダー養成システム、弟子訓練をしている。リーダー「筭長」になるには、世間でいう学歴や年齢、経済力、外見などの資格は要らない。すべての人が「筭長」になれるし、弟子訓練を受けられる。ただ、伝道力だけが「筭長」の資質を問う最大の判断基準なのである。「伝道力」それが「筭長」の実力であり、誇りである。

—朴さん（1地区、東放学園映画専門学校、26歳、男）：僕は2004年8月からこの教会に出席しています。来日した理由はお母さんに進められ、ウオーキングホリデー査証で来ました。、、僕は寮に住んでいました。ある日この教会の筭長と他の4人が部屋にやって来たのです。そこから、この教会に来るようになりました。

—郭さん（6地区、東京国際大学商学部大学生、38才、男）：僕は2004年3月に来日し、すぐこの教会に出席しました。僕は赤門会日本語学校の寮に住んでいました。何人かの筭長たちが寮に伝道するためにやってきたので、僕の方から彼らに声をかけ、教会に行きたいと伝えました。その週から、この教会に通うようになりました。

－朴さん（1地区、東京工業大学大学院生、25歳、女）：私は2002年3月、お父さんに進められ、語学研修しに来日しました。3日後、今の筈長に街頭で声をかけられ、この教会に来ました。

－柳さん（1地区、22歳、男、大学生）：僕は2005年3月に来日しました。その前に、進学のため観光査証で、行ったり、来たりしましたが、住むようになったのは2005年からです。この教会に出席するようになったのは、同じ学校の先輩が今の筈長だったのです。彼に誘われてからこの教会に出席するようになりました

－朴さん（6地区、専門学校、30歳、男）：僕は2001年12月にこの教会に来ました。僕は大学院進学のため来日しましたが、進学に失敗してしまい、専門学校に方向を変えました。今2年です。この教会に来るようになったきっかけは、日本語学校に在籍したとき、同じクラスの2人に誘われたのがきっかけでした。

調査の結果分かったことは、筈長や、筈長になろうと思っている人たちの土曜と日曜の生活が、まさに教会中心であり、教会の時間に沿って送られているということである。彼らの教会に滞在する平均時間はなんと10時間以上である。

Y教会の人たちのこうした生活パターンは、彼らが現世利益を惜しまず放棄する態度が伴わないと成り立たない難しい生活パターンなのである。つまり、信仰を深めたいという強い意志と献身的な行動があるからこそできる、この教会ならではの生活パターンであり、普通の教会では、まねすらできない信者たちの生活パターンなのである。

リーダーになれることは留学生たちにとって大きな意味を持つと思われる。まず、外国に出ている彼らにとって、自分が属して活動できる組織（準拠集団）があることはとても心強いことである。教会は彼らにまず、所属感を与えるし、また、教会の中での各自の位置が確認できる。それによって各自には各自の責任が持たされるので、この教会の一人としてのメンバー意識が湧いて来るのである。普通は異国の文化や馴染めない環境、言葉の壁などで苦しむはずの留学生たちが、そうした悪条件を乗り越え、自信を持って行動できるようになる。ましてリーダーになったら、そういうことで悩む暇もないのである。

③筈は少人数の小グループがあり、筈は「親子関係」といった上下関係の組織である。

新しい信者自身が進んで日本宣教に参加するまでは、教会や教会の人たちとの信頼関係を築かなければならないし、信頼関係が形成されるまでは時間がかかる。だから教会の人たちは新しい信者に関心を持ってケアしなければならない。

その時、「筈」の働きが存分に活かされる。新しい留学生は、敵対感を抱いて「筈の集り」に参加して見るが、筈の人たちの顔を見ると、いつもにこにこして、生き生きした生活を送っているように見えて、その秘訣が知りたくなる。それで彼は、恐る恐る、自分の悩みを打ち明けて相談してみる。筈の集まりの仲間たちは、自分の話しを自身の話しのように、味

方になって熱心に聞いてくれるので彼はびっくりする。そして、他の人のことを聞いてみると、自分とまったく同じ状況に置かれている人がいることにまたびっくりする。それから自分よりひどい状況に置かれている人がいることにもびっくりするのである。「筈の集り」に参加し、自分が今までになく尊重されることを知り、自分も他の人を尊敬するよう、心を掛けて行動するのである。筈の集りではみんながオープンマインドなので、いい話ばかりではない。相手を批判したり、悪いところを指摘したりする。ただし、それはある筈員の信仰の成長を期待して言うことであり、悪口で終わらない。必ず、その点について全員が祈ったり、アドバイスをするのである。また、彼らは聖書に基づいたアドバイスをしてくれるので、今まで持っていた心理的緊張が一挙に解消されたり、ストレスが解消されたりして、解放感を味わうことが出来るのである。そうなると、筈長を頭とする筈員たち皆が親密な「仲間関係・親子関係」になり、新しい家族のような組織になって行く。筈は信仰をベースにしている組織なので、他の社会組織より強い絆で結ばれるのである。ようやく信頼関係が築かれると、他の筈員たちをケアすることに興味を持つようになり、彼は自分の生活の一部を教会の生活に合わせるようになって行く。

—金（4地区、首都大学大学院、28歳、男）：筈の集りは、日曜礼拝が終わってからの集まりです。筈の集りの主題は週報に書いている聖書勉強が中心です。しかし、聖書勉強だけの集まりではありません。筈には色んな人がいます。日本の生活が長い人もいるし、学歴が高い人、低い人、信仰が深い人、浅い人、などなどです。だから、色んな話しができます。信仰の相談はもちろん、日常生活の中での悩みやストレス相談なども話題の一つです。みんなが自分のプライベートまでオープンするから、深い信頼関係が形成されるんです。僕の筈員は全部で3人ですが、みんな来日したばかりですので、筈の集りには聖書勉強の後、アルバイトの情報、大学入試の情報、部屋の情報などを集めて提供しています。教会には人が多いので色々、情報が得られるんです。そして、筈員たちに伝道活動にも積極的に参加するよう働きかけています。筈の集りの活動によって教会に定着することはもちろん、生活の安定、信仰の成長が目に見える形で現れると思います。

—朴さん（1地区、東放学園映画専門学校、26歳、男）：僕にとって筈の集りはとてもありがたいシステムです。筈の集りは、実際、自分のリーダーシップが発揮できる体験場だし、またリーダーシップを開発する集まりです。今、僕の筈には5人の筈員がいますが、その中で年上の人3人がいます。韓国で、年下の人間が年上の人に従われるなんてとんでもない事でしたが、この教会では筈員は筈長に従うよう、徹底的に教えているため、年に構わず、筈の集りの時間だけは私の思うまま、プログラムを進めています。筈員の3人が年上の先輩たちなので、サポートはそんなにしていませんが、聖書勉強だけはきっちりやっていますが、世間話になると、僕のほうが先輩筈員たちに教わってもらっています。そして僕は、一週間で1回くらいは必ず、筈員たちを伝道活動に参加させています。後、2人は来日してわずかなので、アルバイトの情報、部屋の情報などを提供しています。自分も、前の筈長の筈の集りを通して、社会的、個人的にさまざまなサポートを受け、自立するようになりました。僕は来日して一人で自立しようしましたが、情報が得られなかったため、1年を無駄にした気がします。教会生活

は、信仰の成長はもちろん、留学生生活を充実にする近道です。

ー申さん（6地区、社会人、32歳、女、）：私はもともとクリスチャンだったので、最初に出会った筈長のしつこさや厳格さがとても気になった時期がありました。なぜそこまで言うかなとか、そうしなくても十分クリスチャンの行動ではないかとか、色々悩みました。しかし時間が経って自分が筈長になって見ると、なぜ、あの筈長が私にそんなに厳しくしたかが分かりました。個人的な愛情もあると思うが、やはり信仰に基付く愛だからこそ、長く続いたと思います。顔も知らない人に自分の時間、物質、精力を費やすなんて難しいことじゃありませんか。私は前の筈長みたいに、私の筈の筈員たちに愛情を注いでいます。この頃の留学生たちは夢がない人が多いです。彼らのために我が筈は、ビジョンが見付かるようにと祈ったり、大学伝道に行って日本の大学の雰囲気や、日本人大学生はどんな考え方をしているのか、などに触れるように大学への進学を勧めています。私の筈には6人の人がいますが、全員、学生という共通点があり、とても話しやすい環境です。みんな、お互いを励ましながら、立派な留学生生活や信仰生活を送るよう頑張っているので安心です。

新しい留学生は日本に来てから今までの自分と、教会の筈長のことを考えるようになる。なぜ、彼は私に親切だったのか、筈長自身も貧しい留学生なのにご飯を奢ったり、アルバイトを探しに遠い所まで同行してくれるのか、なぜ、早天祈りに誘ったのか、自分は彼にとってなんの役にも立たない人間なのになど、色々考えた末、筈長が自分の利益のためにしたことではないことに気が付く。それで筈長の献身的な姿が格好よく見えはじめ、尊敬するようになる。そこから、新しい留学生は筈長を靈的親として受け入れるようになる。

ー5地区の金さん（31歳、女性、社会人、2004年7月来日）私の筈長は私より3歳も年下の人で、大学生です。来日したばかりの頃は、何も知らなかったの、彼女の言うことを信じ、従いましたが、よく考えて見ると、経験も私より浅いし、まだ、大学生ではないかと思いはじめ、不愉快な気分になりました。しかし、信仰がだんだん成長することにつれて、彼女の聖書の知識、信仰の熱さ、魂に対する熱情に引かれるようになりました。そこから、私は筈長を、筈の集まりの時はお母さんいや、お姉さん扱いにしていました。もちろん生活に戻ると、私が上ですけど、来日暦も筈長より短いので、いつも筈長に相談に乗らせていただいています。韓国では、絶対、有り得ない行動ですよ。

新しい留学生は、信仰をもっと深めるために早天祈りに参加して驚く。大勢の若者たちが朝早くから教会に集って、礼拝を捧げているし、また、地区集まりには、地域の人たちが自分のために祈ってくれたり、“よくいらしゃいました”と励まされる。朝ご飯が安い値段で提供され、筈の人たちや地域の人たちと一緒に朝食を取る姿を見て、筈を家族としてみなすようになる。

ー金さん（6地区、埼玉大学4年、29歳、男）：僕は朝日新聞を配っています。新聞アルバイトは信仰生活や、学校の生活にとっても役に立ちます。まず、このアルバイトが信仰的な面で役に立つということは、教会のメイン礼拝である金・土・日曜礼拝にちゃんと参加できるとい

うことです。僕はこの教会に来て5年目なのですが、このメイン礼拝にちゃんと参加できるアルバイトというのはやはり、新聞アルバイトしかありませんでした。メイン礼拝に参加できないのに信仰が成長するなんてとんでもないです。それから、早天祈り会に参加することは、1日を教会からスタートする意味で、これはクリスチャンにとって、もっとも望ましい理想的な信仰生活だと思います。教会の兄弟姉妹たちと一緒に朝ご飯を取ることは韓国でも珍しい風景でしょう。学校生活に役に立つというのは、朝早いので遅刻などする心配がないということです。時々眠ってしまうが、ちゃんと出席しているので、真面目だと評価されます。そして、新聞アルバイトは他のアルバイトより給料がいいので、今まで学費で困ったことはありませんでした。

朴さん（1地区、東放学園映画専門学校、26歳、男）：僕は今、日本経済新聞を配っています。ご存知のように、日経新聞は休みが多いです（月6回）し、新聞アルバイトは自分の努力によって、仕事を早く終わらせることができるので、他のアルバイトよりいい条件だと思います。それから、今まで僕は、甘えん坊だったので、厳しい仕事をしながら自分を鍛えようと思ってこのアルバイトを始めました。でも、一番大きい理由は、やはり毎日、早天祈り会に参加することができるからでした。早天祈り会の後は、地区の人たちと食事をしながら、日常の悩みや信仰的な悩みに対する色々な相談ができるし、ある場合は、自分が他人のアドバイザーになったりして遣り甲斐がありますね。こういう家族的な雰囲気をもたせてくれるアルバイトが新聞アルバイトではないかと思っています。そしてバイクが使えるので、時間もお金も節約できるので良いなと思っています。

新しい信者は、地域の人たちと一緒に朝食を取りながら、筭長や筭の集りの人たちに感謝し、自分も筭長になり、自分の筭を作ろうと思い始める。それで新しい信者は教会の様々な教育や礼拝、行事に参加し、ついには新しい筭員を求めて伝道するようになる。そして、彼も筭長が自分にやってくれた親切な行動を真似し、また新しい親子関係を築き上げる。

5. 結び

新しい信者が新しい信者をケアし、組織がまた新しい組織を生み出すシステムである弟子訓練システムを採用して18年間やって来たY教会は、2006年現在、3500人以上の人たちが日曜礼拝に参加する超大型教会として成長した。

「筭」という小グループ活動は、Y教会の目標である日本宣教にたいへん役に立つ組織でもあるが、信者たち（留学生）にとっても「筭」は寂しい外国で一番頼れる場所であり、慣れない文化、経済的環境での悩みや苦労を気軽に話せる場所、自分の実力が認められる場所、所属感が得られる場所として受け止められている。つまり「筭」というのは信者たちにとって他国で築いた新しい家族である。

また、「筭」やサランバン(사랑방)は留学生たちにとって、留学の失敗を事前に防ぐ大事な役割を果たしている。

サランバン出身者が墮落したことは殆んどない。また気を落としている留学生の生活力を伸ばす予防装置にもなる。留学生の両親たちも、初めはかわいそうで見られないと思う。日本に来て見て、自分の子供がこのような貧しい暮らしをしているなんて、考えたこともないと泣き出す方もいるようだ。しかし、安心して帰国するようになる。サランバンのメンバーたちの信仰が熱く、礼儀正しい姿を見届けたからである。

筆者はY教会飛躍の一番の要因は小人数の組織「筭」にあると結論付けたい。韓国系キリスト教会では「筭」とは言わないが、小人数のグループを運営している（セル、区域、属会、組という名の組織）。一般教会の小グループも、Y教会が採用している「筭」という組織と大体同じ事をやっている（信者たちの人格を確立させる。人間的な目覚めを体験させる、連帯性、同志意識が芽生えさせる、教化されつつ教化する者となるよう教育させるための聖書勉強やレクリエーションをやっている）。しかし、同じ小グループでもY教会の「筭」がこれらと異なるのは、平信徒が平信徒をケアする点である。これによって、日本でネットワークを持たないニューカマーの留学生がキリスト教会で知り合いを作ったり、コミュニティ参加のための重要な場となったのである。

Y教会の調査で分かったのは、ニューカマーたちにとっての教会の役割である。それは、留学生が教会共同体に参加することによって、拡大家族的な社会関係を築き、帰属感を生み出すという役割である。またそれは、精神的な安定をもたらし、自分は一人でないこと知るキッカケになる。自分は一人でないことを知れば不安でも犠牲者の感覚は減るし、ホスト社会での疎外感から克服することができるのである。

Y教会成長の要因を分析して見たが、海外で活躍している韓国系キリスト教会は、韓国政府ができない精神的、物質的、帰属感などを代わりに与える重要な機能を果たしていることが分かる。

【参考文献】

- 阿部吉夫（1966~72）「農民系宗教の歴史と構造—日本資本主義と天理教団1~10」
『北海學院大學經濟論集』 pp.14~20
- 井上順考編（1994）『現代日本宗教社會學』世界思想社
- 井上順考・考本貢・西山茂共著（昭和56）『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣。
- 井上順考・考本貢・西山茂共著（1994）『新宗教事典』弘文堂
- 井門富二夫（1972）「産業化社會における教団組織論」『世俗社會の宗教』日本基督教団出版局
- 林永彦（2004）『韓國人企業家』長崎出版
- 掛場一彰（1973）「立正佼成會にみる法座の新しい展開」『中央學術研究所紀要』3
（98、112）
- 小熊英二（2002）『民主と愛國』新曜社
- 奥田道大・田嶋淳子（1991）『新宿のアジア系外國人』めこん
- 奥田道大・田嶋淳子（1993）『池袋のアジア系外國人』めこん
- 森岡清美（1975）『現代社會の民衆と宗教』評論社
- 森岡清美（1976b）「法座と眞宗のオザ」『眞理と創造』10
- 森岡清美（1979）『新宗教運動の展開過程』創文社
- 森岡清美（1980a）「宗教運動の展開過程」『宗教時報』50
- 村上重良（1967a）「新興宗教」柳田謙十郎・佐々木秋夫編『現代日本宗教批判』創文社
- 村上重良（1967b）『創価學會＝公明党』青木書店
- 西山茂（1980a）「創価學會」五來重・櫻井徳太郎・大島建彦・宮田登編『講座日本の民俗宗教5 民俗社會と宗教』弘文堂
- 西尾實外（1997）『岩波國語辭典第五版』岩波書店
- 菱山謙二（1976・1977）「天理教教団組織の研究上・下」『社會學ジャーナル』
1-1、2-1 筑波大學
- 栢原曉（1996）『アジア人留學生の壁』日本放送出版協會
- 田嶋淳子（1998）『世界都市・東京のアジア系移住者』、學文社
- 中根千枝（1967）『タテ社會の人間關係』講談社現代新書
- 高木宏夫（1956）「宗教的講の機能—天理教の場合—」『東洋文化研究所紀要』11
- 東京大學（1958）『新興宗教』（ミリオンブックス）
- 東京大學（1959a）「大衆組織としてみた新興宗教—大衆組織における生活規律の問題」『中央公論』6月号

- 東京大學 (1959b) 「創価學會進出の背景」 『週刊讀書人』 6月15日号
- 東京大學 (1959c) 「日本の大衆の人生問題—価値変革への契機をどうとらえるか—」 『思想』 425
- 東京大學 (1959d) 『日本の新興宗教—大衆思想運動の歴史と論理—』 岩波書店 『キリスト年鑑、1999年号』
- 『新約聖書』 「テモテへの手紙一」、3:1-16
- 『新約聖書』 「ヘブライ人への手紙」、13:17
- 『新約聖書』 「ルカによる福音書」、14:23
- Biddy, Reginald W. and Merlin Brinkerhoff. 1994. "Circulation of the Saints 1966-1990: New Date, New Reflections." *Journal for the scientific Study of Religion* 33(3)
- 황성철 (1996) 『목회와 신학』 “전통적 구역제도의 기여와 한계” 7권 5호(5월호), 『牧會と神學』 “伝統的區域制度の寄与と限界” 7卷5号 (1996年5月)
- Kwon, Victoria Hyonchu. (1997) *Entrepreneurship and Religion :Korean Immigrants in Houston, Texas, New York and London*, Gerland Publishing, Inc : 114-116
- 최길성 (1982) 월간조선 “민중신앙의 토착성과 외래성” (조선일보사, 1982년 12월호) 『月間朝鮮』 “民衆信仰の土着性と外來性” (朝鮮日報社、1982年12月号)
- 채이석/ 이상화 (2000) 『건강한 수구룩 사역 어떻게 할 것인가?』 (서울: 기독교신문사), 『元氣な小グループ活動どうやるか』 (ソウル: キリスト新聞社)
- 한국갤럽 (1998) 『한국 개신교인의 교회활동 및 신앙의식 조사보고서』 韓國ギャラプ 『韓國キリスト教信者たちの教會活動および、信仰意識調査報告書』
- 한국통계청 (1999) (사회지표 조사 결과), 韓國統計廳 (社會指標調査結果)
- 『한국어 사전』 금성교과서 (1987) 『韓國語辭典』 (金星教科書、1987年)
- 정두근 (1996) 『목회와 신학』 “오늘의 구역제도, 왜 문제인가.” 7권 5호(5월호) 『牧會と神學』 “今日の區域制度、なぜ問題なのか” 7卷5号 (5月号)
- 김성건 (2004) 『교회선택의 조건』 제2부 “한국교회의 성장과 교인의 수평이동: 사회학적 고찰”(서울: 교회성장연구소) 『教會選擇の條件』 第2部、“韓國教會の成長と信者の轉入: 社會學的考察”(ソウル: 教會成長研究所、2004年)
- 『국민일보』 『國民日報』 2006年6月7日
- 이원규 (1992) 1월 『기독교사상』 “공동체의 위기와 한국교회의 책임” 35권 1호, 『キリスト教思想』 “共同体の危機と韓國教會の責任” 1992年1月、35卷1号
- 이원규 (1994) 『한국교회의 현실과 전망』 성서연구소, 『韓國教會の現實と展望』 (ソウル: 聖書研究社)

- 이권규(1998) 『한국교회 무엇이 문제인가』 6장 “한국교회의 성장둔화 문제” 감리교신학대학교 출판부, 『韓國教會何が問題なのか』 “6章、韓國教會の成長の鈍化” (監理敎神學大學出版部)
- 이규태(1983) 『한국인의 의식구조』 신원문화사, 『韓國人の意識構造』 シンウオン文化社
- 문석호 (1998) 『21C 한국교회와 공동체 운동』 (서울: 줄과추), 『21C韓國教會と共同体運動』 (ソウル:糸と錘)
- McFarland, H. Neill (1967) *The Rush hour of the Gods*, Macmillan. (内藤豊・杉本武之譯(1969) 『神々のラッシュアワー』 社會思想社
- 옥한음 (1987) 『평신도를 깨운다』 (서울: 두란노서원), 『平信徒を起こせ』 (ソウル:ドラゴン書園、1987年)
- 옥한흠(2005) 『다시 쓰는 평신도를 깨운다』 (서울: 국제제자 훈련원) 『書き直した平信徒を起こせ』 (ソウル:國際弟子訓練院)
- Perrin, Robin D, and Kennedy, Paul (1997) "Examining the Sources of Conservative Church Growth: Where are the new Evangelical Movements Getting Their Numbers?" *Journal for the scientific Study of Religion* 36(1)
- 로버타 헤스테네스 (1990) 김의원/ 조남수 옮김 『소그룹을 위한 성경연구 지침서』 (서울; 아가페문화사) 『小グループのための 聖書研究指針書』 (キムイウン/ジョナム스譯) (ソウル: 아가페文化社)
- 사라 리틀 (1978) 김대균 옮김 『신앙, 친교, 교육』 (서울: 한국기독교교육학회) 『信仰、親交、教育』 (ソウル: 韓國キリスト敎敎育學會) p28
- Yoon, in-jin(1997) *On My Own: Korean businesses and race relation in America*. TheUniversityofChicagoPress:100-173
- William Chadwick(2002) “Stealing Sheep: the Church’s Hidden Problems with Transfer Growth.” 『羊泥棒』 (전의우 옮김)(서울: 규장, 2002), p264
- <http://www.kccj.net/intro/history.html>
- <http://jp. chtoday.co.kr/template.artile.htmlcode=rs&id=5440>
- <http://www1.worldlink.co.kr/bluebod/buboard.cgi?db=fycsg&page=1&act=pread&num=56>
- <http://cafe.daum.net/japantokyodaumcafe>
- <http://100.naver.com/100.nhndocid=63708/>
- <http://www.kr.emb-japan.go.jp/>
- <http://www.kr.emb-japan.go.jp/>

要 旨

本稿は、東京の新宿で急速な成長を成し遂げ、注目を浴びている韓国系キリスト教會の成長要因を捉えることを目的としている。東京の一部の地域ではあるが、信者數1000人以上の教會が現れ始めたのはごく最近のことである。

特に今回、調査の対象になったY教會は1988年に創立した教會で、調査時点の2006年には、まだ18年しか持たない教會である。しかし調査時にはすでに、毎週日曜日3000人を越える信者たちが礼拝に参加する大型教會として成長していた。

それは日本のキリスト教の歴史の中でも異例のことであり、今は日本のキリスト教の中でも一番大きい教會と言われている。本稿は、この教會の成長のカギを握ると思われる小グループ活動「筭(スン)」を分析することによって、教會成長の要因を明らかにし、それを通して韓國人留學生やニューカマーたちの實態に迫ろうとするものである。

キーワード： 筭(スン)、筭長、筭の集まり、サランバン、弟子訓練、
韓国系キリスト教會、長要因、礼拝、大型教會、小グループ活動、
教會成長、韓國人留學生、ニューカマー

투 고 : 2009. 2. 28
1차 심사 : 2009. 3. 14
2차 심사 : 2009. 3. 28